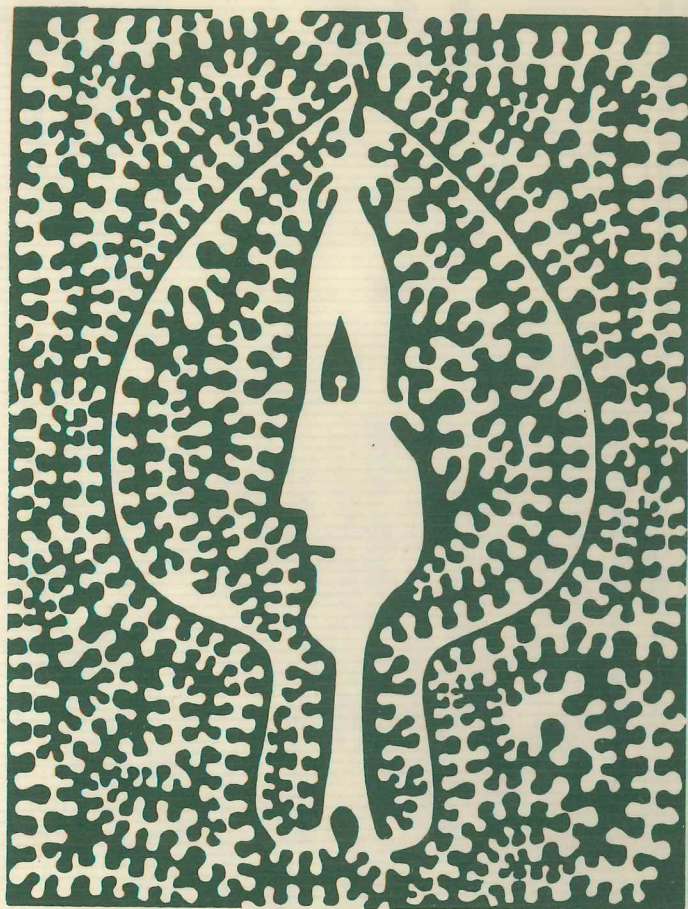


# 古書巡礼

品川力著



青英舎版

# 古書巡礼

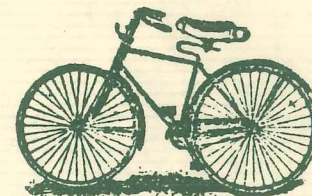
品川力著



青英舎版

発行 青英舎

発売 星雲社



定価 1500 円

4032



ISBN4-7952-2208-8 C0095 ¥1500E

ゴッホの文献を戦災によって失われた式場博士の依頼で、本邦ゴッホ文献を集めだしたら、これに対する異常な興味を覚え、博士が昭和七年の労作『ファン・ホッホの生涯と精神病』の大冊上下をあらためて友人のところまで借りに出かけた。

それで僕が驚いたのはその下巻の書誌で、これだけのものを集められた著者のゴッホ熱愛と、そして更に僕の驚嘆したのは、「日本に於けるホッホ研究の歴史」の所で、著者の調べたゴッホの呼び名が二十四種も記載されていることであつた。

たまたま博士と落合つたので、中国ではゲーテを「歌徳」とかいているから、多分ゴッホなどもあることであろうと話すと、是非ともそれが知りたいとのことであつたから、文献調査に美術研究所に出かけた時にたずねたがここでは分らず、中国研究所で初めてゴッホは「哥胡」であると教えられた。

この間、河瀬蘇北著『現代之人物観 無遠慮に申上候』（大正6、一松堂）を見つけた。

新進作家谷崎潤一郎、未成品森田草平などもあれば若輩下村海南もある。題目だけでも面白い。実業家では串田萬蔵もあるので、串田孫一君に見せたくなって買った。

高村光太郎のところを見ると、ゴッホやその他新しい美術を我国にもたらした云々と書いてるので、このゴッホはどうかと博士の著書を開くと、これは出ていなかった。

またゴッホをモデルにした一篇がはいっているヘッセの「内面の道」で記者三井光弥はファン・ゴッグとやっている。これは記録されているものと思っていればこれもお出でいなかった。

最近、「西日本新聞」に出ていた林房雄の「善三郎とゴッホ」という随筆で、「五分」という文字を使っているが、これはどうもびったりとこないゴッホだ。

串田君によると喫茶店に「呉峰」があるとのことだが、これも加えると二十九種の呼び名を数えることになる。

ところが詩聖ゲーテとなるとゴッホなどの比ではない。ゲーテ文献探求二十年の僕が、いつかこれをノートなどと考えながら、ついそのままになっていたが芥川龍之介の親友で芥川の著書の校正などをよくやり校正の神様とまで云われた神代種亮がゲーテのよび名を二十九種上げて、「東京朝日新聞」に書いたことを何かで知った僕は、年月はハッキリしなくとも分ることと思ひ、この春朝日の厚生部に清田次長を訪ね、調査部に案内してもらったが、発表日時の不明から見つけ出すことができず残念だった。

それではとにかく、僕の知っているゲーテを全部かきとめようとノートにとってみると、どうしても二十一種よりしか浮かんでこない。

こうなると神代氏の二十九種が気になって仕方がない。そこであれこれと文献をひっくりかえしてみると昭和五年三月十八日「ヨーロッパ語の音訳」と題して神代氏がかかれたことがハッキリ分かったので、または朝日新聞社に出かけた。

さすがは神代氏である。よくも調べたものだ。いまその前後の文章はカットして、ゲーテの表のある部分だけをここに引用する。この表は年代順に列べてあって（なま）のなかからはじめてそれを作った訳者の名でカッコしてないのは使った人の名である。

ゴエテ（菊池大麓）明治十二。山田美妙、矢崎嵯峨の舎、三井甲之。

ギユート（加藤弘之）明治十四。末松謙澄、平田東助、福地桜痴。

ギエーテ（加藤弘之）明治十五。尾崎庸夫。

ギョート（中江兆民）明治十五。

ギョーツ（同）明治十六。

ゲーテ（井上勤）明治十七。大西祝、徳富蘇峰、山口虎太郎、夏目漱石、内村鑑三、高山樗牛、高木伊作、大和田建樹、井上哲次郎、姉崎嘲風、桑木嚴翼、上田萬年、島村抱月、藤代禎輔、新村出、綱島梁川、繁野天来、幸田露伴、坪内逍遙、土井晩翠、湯原元一、斎藤野の人、秋元蘆風、永井荷風、岩城準太郎、小原無絃、小栗風葉、志田義秀「百科大辞典」監釜

天鷲、片山孤村、小野秀雄、西田幾多郎、厨川白村、森田草平、生田長江、阿部次郎、菊池寛、中山昌樹、東新、日夏耿之介、林久男。（量的にはこれが多）

ギユエテ（末松謙澄）明治十七。

ゲオエテ（品田太吉）明治十七。

ゴアタ（高田早苗）明治十九。

グウイーテ（中根秀亭）明治二十一。

ゲエター（福本日南）明治二十一。石橋忍月。

ゲーター（福本日南）明治二十一。

ゲエター（同）同

ギヨウテ（森鷗外）明治二十二。

ギョーテ（同）同。坪内逍遙、市村瓊次郎、北村透谷、赤司麗梓、夏目漱石、綱島梁川、二葉亭四迷は明治十八年にこれを作っているけれども発表していない。

ギョター（森鷗外）明治二十二。山岸光宣。

ギョーター（森鷗外）明治二十二。

ギョターイ（国府寺新作）同。

ゴエア（矢崎嵯峨の舎）明治二十三。

ギョテ（市村瓊次郎）明治二十三。

ゲエテ (外山正一) 同 磯野依絲軒、青木昌吉。

ギヨヲテ (森鷗外) 明治二十三。

ギヨオテ (同) 同 坪内逍遙、北村透谷、山口秀高、後藤宙外、島村抱月。

ゲヨテ (国民新聞) 明治二十三。

ゲヨ一テ (内田魯庵) 明治二十五。

ゲエテ (上田敏) 明治二十八。

島崎藤村、久保天髓、橋本青雨、谷崎潤一郎、里見淳、芥川龍之介、秦豊吉。

ギヨエテ (島崎藤村) 大正四。

ゲイテ (石躍信夫) 大正十二。

ゲヨエテ (茅野蕭々) 昭和三。

この表のあとに坪内博士が古くシェクスピアを動地 Shakespeare、ゲエテを驚天としゃれて書いたことや支那では「歌徳」又は「哥徳」と書いていると紹介されているが、この中国の書き方の出所は明らかにされていない。これはいま中国の副総理になっている有名な郭沫若で、彼は「フウスト」(浮士徳)「ヴェルテルの悲み」(少年維特之煩惱)や「ヘルマンとドロテア」(赫曼與寶綠苔)などの訳者で、歌徳とも哥徳とも書いているのである。

またシルレルの劇作の訳者である楊丙辰は、ゲエテ(Y. W. V. GOETHE)を「就是葛徳」と書いている。さて、そこで僕がこの神代氏のゲエテ表を見て、妙に感じられたのは、あのような博字

の氏が、漢字音のゲエテの名を三つしか上げていないことである。

明治十七年、同二十六年には第五版の井上勤訳『禽獣世界狐の裁判』依田学海の序には独逸人倪提以博覧多識著とかかれてあり、基督教界の住谷天来はその『黙庵鈔』に於て「芸天<sup>ゲテ</sup>」とやってのけた。これなどは昭和年代の著書であるからまあ仕方がないとして、明治三十三年の「明星」創刊号にウエルテルの悲歎を書いた内海月杖は、短い文章の中に「ヴィテ、ケエテ、ゲエテ」と三通りの呼び方をしていることや、明治十年小林雄七郎訳『日耳曼国史上巻』のゴイセなどを神代が取上げていないことは合点がゆかぬのである。そこで氏の表に出ないものをここに掲げると、俄義的、芸天、倪提以、芸亭、芸陽亭、葛徳、曉蛙亭、ゴイセ、ヴエテ、ケエテの十種があり、東京ゲエテ協会の粉川忠氏が教えてくれたのにゲエテがある。これは明治五年二月中村敬太郎訳ミルの『自由之理』第二巻二六頁にあるとのこと、明治二十七年の『和漢泰西名家金言集』には、及義的と俄以得との二つがあり、明治二十六年『万国人名辞典上巻』にはふ、を、ぬ、げ、え、て、がある。もうこの位のものであろうと思つて原稿を書き終ると、『鳥谷部春汀全集』(明治42)で、ギョ一テがあったり、ウイリアム・スウィントン『万国史要』(明治23)の訳本では、思いもよらぬ二文字のゲテというアッサリしたのが見つかる始末で、あと五人のゲエテを探して、「五十人のゲエテ」とやりたいところだが、欲張つても切りがないことであるから、この辺で一まず筆をおく。

附記 曉蛙亭——は公の文献にはない。これはほかでもなく平野啓司博士の千葉県長者町にある

別荘に歌人津輕照子女史が命名されたもので、漢字音の中では一ばん詩的な味があるので、僕の表の中に加えさせてもらった。

## 反ゲーター的な、あまりに反ゲーター的な

「古書月報」 昭和37年3月

反ゲーター的な、あまりに反ゲーター的な

昨年の八月八日のことである。関西ゲーター協会に『ゲーター年鑑』(4)の五〇〇円を払込んだところ、九月になってから「会員外の方には売らない」といって振替用紙で返金されたが、指定局が「大阪江戸堀」になっているので、これを先方に送り返して、「私は井上正蔵氏を通じてすでに会員となり『ゲーター年鑑』は(2)(3)も送附を受けている者であるから、御調査の上、御送本願います」と手紙を添えて出した。するとこんどは十月二十四日になってから、一言も書いてなく五〇〇円が返金されてきたが、それがなんと、こちらから八月に送金した際の払込通知票の切取ったものであった。まさか事務会計を小学生がやっているのではあるまい。この非常識ぶりには開いた口がふさがらなかった。こんな人間を相手にしてはいっ迄たっても駄目だと考えて、十一月三日に会長の岡本修助氏宛にいままでのことを一切かいて、返信料を添えて手紙を出した駄目であった。

## 古書巡礼

1982年2月15日 第1刷

著者 品川 力

装幀 品川 工

発行者 堀健二郎

定価 1500円

発行所 株式会社青英舎  
東京都千代田区神田小川町3-11-2-812 電話(291)6470代

発売所 株式会社星雲社  
東京都千代田区神田錦町3-6 電話(294)5818代

印刷所 株式会社平河工業社  
株式会社 Now printing

製本所 黒田製本株式会社  
© Tutomu Sinagawa 1982  
printed in Japan

ISBN4-7952-2208-8 C0095 ¥1500E

●著者プロフィール 太宰治の「ダ  
ス・ゲマイネ」の中のペリカンであ  
り、織田作之助の友。精緻な読書人  
書誌人であり、無類の自転車愛好家。  
年は、明治37年新潟は柏崎の生まれ。  
時にはかの「アンアン」のモデルで  
あり、麦藁帽子のにあう清冽なタン  
テイズムの人。誰が名付けたか、書  
物探索の冒険家。その著書には、奥  
付の後に増補書込六頁もついた『内  
村鑑三研究文献目録』（明治文献版、  
後に荒竹出版より増補版）がある。  
他に、日本におけるホイットマン  
文献「比較文学」⑦⑧（昭和39年11  
月、昭和40年12月）、日本におけるホ  
ー文献「日本比較文学学会会報」4号  
（21号（昭和31年）35年）、日本に  
おけるゲーテ文献調査（東京ゲーテ  
記念館——昭和25年に参加）、『日本  
の英学一〇〇年 別巻』、『日本の英  
学者・英米作家・総合文献』（研究  
社、昭和44年）の章執筆がある。